

# 藤野千夜「少年と少女のポルカ」に描かれた〈性〉と境界線

佐々木 望

## はじめに

高校というある種の閉鎖された環境を舞台に、思春期の高校生たちとそれとのセクシュアリティについて描かれた「少年と少女のポルカ」には、トシヒコ、ヤマダ、ミカコの三人が主要なキャラクターとして登場する。そこには身体的にも精神的にも発達過程と言える彼等が、同一化を推奨する〈学校〉の中で各自個性を自覚し希求する姿が描かれている。トシヒコは自分がゲイであることを自覚している男子高校生、ヤマダはトシヒコと同じ男子校に通いながらも自身のことを女だと自認しているキャラクターである。またミカコは、ある日を境に電車に乗れなくなってしまった（その明確な原因は作中には描かれていない）トシヒコの幼馴染みである。物語は、大きな事件が起つたり何かの問題を解決したりといった劇的な展開は用意されておらず、淡々と描かれる高校生の日常の中に、セクシュアルマイノリティを含む登場人物たちが組み込まれていている。

考察するにあたり本作に登場する主要キャラクターは高校生であるため、彼等の経済的な側面は考察の対象外とすることを言及しておく。作中において〈ヤマダのアルバイト〉が唯一経済的な話題と

して触れられるものであるが、これは治療費捻出のためのものに過ぎず、労働で得た賃金はすべて自己への投資に使用されるものであり、生活を営むための労働と捉えることはできない。そして他の登場人物たちがアルバイトを含め収入を得る活動をしている描写がないことから、彼らを経済活動から切り離されたところに位置付けられた存在とする。本作においてはその設定上解消されているセクシュアルマイノリティの経済面に関する問題であるが、これは重要な考察テーマとも成り得ることは確かと言えるだろう。ただし本稿においては唯一賃金を得ていているヤマダの労働については、その労働自体はなく、労働の目的（性別適合手術に向けての治療）に着目することとする。

男子校という舞台の中で起こるヤマダの「キュロット」から「スカート」への変身が物語における一つの山場となっていることからも、〈男性〉がジーンズの境界線を超えることになぜ違和感が生まれるのか、「キュロット」と「スカート」の間にあ一枚の布に過ぎない境界の存在を認め、そこをまさに飛び越えようと試みている。

考察するにあたり本作に登場する主要キャラクターは高校生であるため、彼等の経済的な側面は考察の対象外とすることを言及しておく。作中において〈ヤマダのアルバイト〉が唯一経済的な話題となる物語として本作を読み解いていきたい。

## 一、学校という場所によつて顕在化する〈性〉の境界線

学校という環境は、そのセクシュアリティを視覚的に制限することができるとの要素が多分に含まれた場所と/or/いうことができるだろう。例えば英語の授業中、一人称は「He」「She」のどちらを使うのか、使用するトイレは男女の二つに分けられているが、そのどちらにも自身を所属させられない生徒はどのトイレを使用すればいいのか等、男女どちらかのグループに所属することの選択を余儀なくされる環境であると言えるだろう。ましてや、本作の舞台にもなつてゐる男女別学の学校は、性別の一義的な解釈によつて成り立つてゐるもののが顯著な例とも言える。

本作でもヤマダのアイテムとして登場する学校制服は、多くの学校がそれを指定し、同時に男女がカテゴライズされ、性別を視覚的に判断させる。だが近年その学校制服は少しずつ変化してきている。多くの生徒たちは男子生徒であることの象徴としてのズボン、女子生徒であることの象徴としてのスカート、そのどちらか（概ねその身体的性別と同じ性別の制服）を着用することを義務付けられてゐるが、名古屋経済大学高蔵高等学校では、女子が着用する制服はスカートではなくキュロット・スカートを採用しており、朝日新聞では「全面的にキュロットスカートを採用するのは全国的に珍しい」として報じている。<sup>1</sup>また、同校ホームページにはNHKのテレビ番組「Rの法則」<sup>2</sup>から「チャリ通の悩み報告」（論者注：「チャリ通」＝自転車通学）という企画において取材を受けたことも報告されてゐる。<sup>3</sup>同校がキュロット・スカートを導入したのは一〇一三年度からであるが、その目的は痴漢や盗撮の被害を防止することであり、

「かわいさと防犯性を両立」させたとしている。また北海道の道立深川東商業高校では、女子生徒が防寒のために冬場の制服としてスラックスを選択制ではなく全校導入している。<sup>4</sup>

これらの事例は共に女子生徒の制服に対する新たな試みと言えるが、その目的は女子生徒への「防犯」「防寒」に対する配慮であり、生徒のセクシュアリティに対する配慮として取り入れられた試みではないようだ。

だが今年（二〇一四年一一月一一日）、山梨県富士吉田市の県立富士北陵高校にて、男子生徒と女子生徒が制服を交換して一日を過ごすイベントが実施された。〈男／女らしさ〉を見つめ直すことを目的とし、全校生徒を対象に参加者を募つたという。

この取り組みは、昨秋、建築デザイン系列の生徒が行い、社会問題の解決策を競う「全国高校デザイン選手権」（東北芸術工科大主催）で優勝。今年は対象を全校の有志に広げた。普段とは異なる視点に立つことで、自分や周囲の人への認識を考え直し、「当たり前」の感覚を棄てる狙いがある。<sup>5</sup>

高蔵高校や深川東商業高校で実施された取り組みには、女性がスカートから〈解放〉され、学校が制服として女子生徒のスラックスやキュロット・スカートの着用を許可することは、たとえそれが防寒や防犯目的であつたとしても、女性のパンツスタイルに対して人々が違和感を抱かないという意識が作用していると言えるだろう。その〈らしさ〉の意識を見つめ直そうとしたのが富士北陵高校の取り組みである。このような取り組みは全国的にも稀な例と言え、日本の新聞やテレビニュースに留まらず海外のインターネットサイトでも話題となつた。

学校制服のズボンとスカートは、学校を〈性二元の世界〉と見做すことを強固にするアイテムの一つとも言える。そしてスカートとズボンの間にある境界線を越えることが許されているのは「(社会的に女性と見做されている) 女性だけ」なのだ。

ヤマダの通う男子校には、過去に裁判沙汰にまでなった制服に関する問題があり、制服着用が絶対義務ということにはなっていない。私服での登校が認められているヤマダの学校で、ヤマダがたとえスカートを穿いたとしてもそれは私服の着用ということになり、本来ならば校則違反にもならず、注意される対象になることもないはずである。しかし学校側は、ヤマダが「どうやら事情が違う」生徒であると判断している。これはヤマダが〈スカートとズボンの境界線を越えることを許された性〉ではないからである。男子校である学校側が想定していた私服は〈ズボン〉なのだ。社会的に二分化された男女の内、男性側の共同体である男子校の生徒が私服として着用するものはズボンである、という認識であつた学校側にとつて、境界線を越えようとするヤマダは「どうやら事情が違う」生徒となってしまうのである。

ヤマダと逆のタイプ、つまり精神的には男性だが身体的には女性のキャラクターが女子高に通い、私服としてズボンを穿いて学校に行く、という筋書きの場合、ヤマダの場合に見られたような描き方はなされないだろう。なぜなら、女性のズボン着用は〈自然なこと〉であり、男性のスカート着用は〈不自然なこと〉という社会通念とも呼べるもののが存在しているからだ。

スカートとズボンの境界線を越えることが許されない共同体(=男性の共同体)に属すヤマダの服装は、時間の経過と共に「半ズボ

ンとキュロットの中間みたいに見えるボトム」から「益々スカートに近づいた型」へと変化していく。それはまるでホルモン投与等の医療行為によって身体が女性へと変化していくのと比例するよう、キュロット・スカートからスカートへと境界線を越えて変化していく。

キュロット・スカートを着用することでまだ境界線を越えていないと見做されていたヤマダだが、それが「完全なスカート」となった日を境に周囲と学校側の対応は一変し、「本物のスカート」を穿いてきたヤマダに対し周囲はそれまでと違う反応を示す。「スカートみたいなキュロット」、つまり偽物のスカート姿であつたヤマダは野放状態であつたにも関わらず、それが〈本物〉になると途端にヤマダに向けられる周囲の視線は変化し、ヤマダは〈異質な者〉となってしまうのだ。

男子高という環境下において、キュロット・スカートが偽物のスカートと位置付けられることで、ヤマダ自身をも〈本物〉ではなく〈偽物〉の存在として位置付けられていたと読み取ることができる。そしてヤマダのキュロット・スカートという〈偽物のアイテム〉によつて周囲は見過ごすことができていた事実を、それが〈本物の女性にだけ許されたアイテム〉、つまりスカートになつたとき、異質な者となつたヤマダを周囲は見過ごせなくなる。ズボン、スカートがそれぞれ対極の位置に属すとするならば、キュロット・スカートはその丁度中間の地点に位置するものと言える。ここで作品タイトルにある「ポルカ」を思い出せば、二拍子のリズムを刻みながら二つの拍の間を振り子のように揺れるポルカの様は、どちらにも振れることのできる〈間〉にいるヤマダを想起させるだろう。ヤマダは

二極の間に属していたことで、どちらの極に属すことができる猶予を持つており、だからこそ周囲の人々はヤマダを黙認することができていたのだろう。

藤野は「ラブリー・ラネット」(『群像』一九九七年七月号)内で、スカートというアイテムを使い女性性を表現している。次の引用は、ニューハーフの姉を持つキリコが路地から現れた中年紳士に接触しそうになつた場面である。

禿頭の男性が倒れた喫茶店の前からは、ちょうど救急車が発進したところだつた。昔、学校で習つたドップラー効果をいかんなく發揮するべく、赤いランプを回転させた白い車は遠ざかつていく。その背を見送りながら少し行くと、ショウウインドウに節句の写真がずらりと並んだ古めかしい写真館の脇の路地から、ゆで卵に楊枝の足を刺したような恰幅のいい中年紳士が飛び出して来てあやうく接触しそうになつた。

「すみません」

自分のせいだけではないけれど素直に謝つて漕ぎだす肩ごしに、バカヤロウ、スカートはけ、と謎の罵声を浴びせられた。

キリコはパンツ姿だった。そんなにスカートがよけりや自分ではけよ、とペダルを漕ぎながら憤り、姉のことを少しだけ思い出した。

中年紳士がキリコに対し発した「スカートはけ」という言葉は、この中年紳士の「女性＝スカート」という意識を暗に示していると言える。またそれと同時に、キリコはその言葉を「謎の罵声」として受け取つていることから、中年紳士とキリコの間にある服装と性別の繋がりに対する意識の違いも浮かび上がつてくる。男／女とい

う言葉ではなく、ズボン／スカートという、対象を無意識にカテゴライズしてしまう視覚的アイテムを使うことにより、作者は性を無意識にカテゴライズしてしまう可能性に訴えかけ、読者は既存の性規範に無意識に従つていたことを認識するのだ。

ヤマダがスカートを穿いたことが「その日一番の話題」となったこと、これは男性がスカートを穿く事に対する違和感による現象であると言えるが、では何故そのような違和感は生まれるのだろうか。中村桃子は日本語のうちの「男ことば」「女ことば」の観点から、〈男〉と〈女〉のジェンダー秩序における支配関係について次の様に述べている。

女性が「男ことば」を使っても、「女らしくない・乱暴・品がない」と批判されるだけであるが、男性が「女ことば」を使ふと、たんに「男らしくない」だけではなく「同性愛だ」とみなされる。これは、女性がズボンをはいても「男になつた」とは言われないが、男性がスカートをはくと「女だ」と言われる場合と並行している。なぜ、このような違いが生じるのだろうか。

それは、〈男〉と〈女〉というジェンダー自体が非対称な支配関係にあるからである。ジェンダーの中では、〈男〉が「無徴・標準・中心」であり、〈女〉は「有徴・例外・周縁」に位置づけられている。〈男〉が人間の基準であり、〈女〉はその亞種である。(中略) ジェンダー秩序の中では、「無徴・標準・中心」である〈人間(男)〉の中に、「有徴・例外・周縁」である〈女〉が含まれているという構図になつてゐるのである。

つまり「ズボン」は「人間（男）である」ことを示しているため、女性がズボンをはいても「男になつた」とは言われないが、「スカート」は「女である」ことを示しているために、男性がスカートをはくと「女になつた」とみなされてしまうのである。

「有徴・例外・周縁」である〈女性〉がすでにこれらを含んでいる「無徴・標準・中心」に溶け込むことよりも、「無徴・標準・中心」である男性が、わざわざ「有徴・例外・周縁」の枠に参入するほうが目立つ。女性がジェンダーの規範を超えてもたんなる逸脱になるが、男性がジェンダーの規範を超えると、ジェンダーの変更になつてしまつ。

中村の指摘によれば、〈人間＝男〉なのであつて、そこに〈亜種としての女性〉が存在しているという。男と女の間に境界線がありそこを超えるかどうかではなく、人間に内包されてはいるが〈有徴のもの〉として女があるというのだ。

この指摘に見られる〈女性の有徴性〉という点は、ジュディス・バトラー『ジェンダートラブル・フェミニズムとアイデンティティの攪乱』内でも「女のジェンダーだけがしるしづけられ、男のジエンダーは普遍的人間と融合してひとつのものとなる。ゆえに、女はセックスによって定義づけられるが、男は身体を超越した普遍的な人間性をもつものとして認められるのだ」として述べられている。これらの指摘を本作に置きかえると、「無徴・標準・中心」としての男性だけで構成された共同体の中でキヨロット・スカートによって保たれていたジェンダーの曖昧さが、スカートという「有徴・例外・周縁」のものに変化したことで、ヤマダも「有徴・例外・

周縁」の存在へと変化してしまつたと言う事が理解できる。服装は、対象となる人物のジェンダーを単純且つ無意識に判断させてしまうものであり、この〈服〉という小道具は、ジェンダーがいかに不安定でありながらも強固なものとして人々の中に根付いているかということに気付かせる役割を担つてゐると言える。

## 二、「病理」としての孤独な個性の行方

ヤマダは、性別適合手術を受ける前段階であるホルモン治療を受けている。自分の身体と心の性が一致しない状態であり、身体の性を心の性に合わせるために医療行為を既に始めてゐるのだ。作中においてその言葉こそ明記されていないが、ヤマダは〈性同一性障害の患者〉として位置付けられていると言うことはできるだろう。ヤマダ個人は自身のセクシュアリティに対し、「ホモ」ではなく、身体が間違つて生まれてきた存在としている。本作発表当時、性同一性障害という言葉がどれほど認知されていたのかはわかりかねるが、現在(一〇一四年)この言葉自体は広く知られているものとなつた。

性同一性障害という言葉は〈障害〉として病理化することでトラブル・ジエンダーを社会に認知させる面がある一方で、〈障害〉という言葉からネガティブイメージが先行してしまう点も見過ごすことのできない名称ではあるが、現在の日本では次の様に定義されてい

この法律において「性同一性障害」とは、生物学的には性別が明らかであるにもかかわらず、心理的にはそれとは別の性別

(以下「他の性別」という。)であるとの持続的な核心を持ち、かつ、自己を身体的及び社会的に他の性別に適合させようとする意志を有する者であつて、そのことについてその診断を的確に行うために必要な知識及び経験を有する一人以上の医師的一般に認められている医学的知見に基づき行う診断が一致しているものと。いう。

これは二〇〇三(平成一五)年七月に成立した「性同一性障害の性別の取扱いの特例に関する法律」内の(定義)第二条である。法的に「性同一性障害とは何であるか」が定義されたのは本作が発表されてから数年後のことであり、名称が付くことにより病理化された性同一性障害を体現する存在としてヤマダを読み込むことは、この名称を知る現代の読者にのみ可能なことと言えるだろう。学校という性別を含め同一化が推奨されやすい環境下において、「初老の国語教師」が「異星人」を見るような目でヤマダを見送る描写はある種「普遍的」な「初老教師」の反応と言えるかも知れない。

ヤマダのセクシユアリティについては、本作が第十八回野間文芸新人賞の候補作となつた際の選評(『群像』一九九七年一月号)を見

見てみると、秋山駿は「男から女への性転換、同性愛などをくつたくなく語っている。おかしな才能だが、このままでは軽々しい」とし、ヤマダのセクシユアリティを「男から女への性転換」と表現するに留まり「性同一性障害」として解釈されていないことが伺える。柄谷行人は「ゲイの問題を、少女漫画のノリ(美少年趣味)で考えるのはやめたほうがいい。そんなものは日本的なまやかしである」と評しており、ヤマダのセクシユアリティに関しては触れられていない。

日本精神神経医学会・性同一性障害に関する委員会は、一九九八年五月「ブルーボーイ事件」によって世間に一人歩きしてしまった性別適合手術に関する誤った認識を「性同一性障害の診断と治療のガイドライン」を公表することで、「性別適合手術(sex reassignment surgery: SRS)は、性同一性障害の治療として正当な医療行為である」と位置付けた。

初版ガイドラインは性別適合手術に対する世間の否定的な認識の払拭にプラスの影響を与え、次いで初版ガイドラインに沿わない治療を開始しているケースへの対応が提示された第二版が公表された。またこの第二版では、従来原則として段階治療(第一段階・精神的手術)がなされていった性別適合手術が、必ずその順序通りでなければならぬわけではないという明言も加えられた。そして二〇〇三年五月に成立し、翌二〇〇四(平成一六)年七月に施行された「性同一性障害者性別の取扱いの特例に関する法律」(通称、性同一性障害特例法)との整合性保持のため、第三版が再改定された。

「正当な医療行為」としての性別適合手術を受ける前段階のヤマダは、作中においてある種病理化された存在とも言える。そして服装の変化に伴い、ヤマダの病理化された身体は徐々に「正当な医療行為」を受けるにふさわしい状態へと変化していくのだ。  
〈偽物〉であったヤマダは治療することによって〈本物〉になることができる。学校関係者や家族を含む第三者にとって、ヤマダは〈偽物であることが日常〉であつたため、ヤマダが〈本物になる〉ことは彼等にとって非日常的現象として映るのだ。一方ヤマダは、

〈偽物であることは非日常〉であり、〈本物としての日常〉を手に入れるため、ホルモン投与等の治療を行い、自らの身体を変化させていく。

そんなヤマダとクラスメイトのトシヒコは、自身がコミュニケーションの中に入り込むこと、また自分を他者に理解してもらうことを望んでいないスタンスを示し、閉鎖された学校という共同体の中に属しながらも自分の世界と他者の世界を同一化することなく、他者に対する対しては「興味はない」「どうでもいい」という関心がない風を装う語りが展開される。トシヒコはヤマダが自分のことを「アコ」と呼ぶことに対し、「ヤマダはヤマダの世界で楽しくやっているのだ」と無関心な態度を示しながらも、その実トシヒコはヤマダが〈男と女の境界線を超える行為〉に対して否定的な立場を取っている。

トシヒコは、ヤマダが学校にスカートを穿いて来るより前に、ヤマダのスカート姿を目撃している。半ズボンを穿き「少年っぽい服装」

であつたヤマダのスカートから伸びた脚は、トシヒコにとって「女みたいなくせに女ではない」「不愉快に性的」なものとして映つており、動物園へ行く誘いを受けた際、彼は「絶対に嫌だ」と拒否の態度を示す。彼がヤマダに好かれることを「重荷」と感じ拒否を示すのは、ヤマダを女として認識しているからでも、男として認識しているからでもなく、「純粹に男」が好きなトシヒコにとって、ヤマダが〈女になろうとする男〉という〈男と女の境界線を越えようとする存在〉であるからなのだ。自分のことを「純粹に男が好きな男」と表するトシヒコにとって、個人が男女の境界線を越えることは「純粹」なことではないのだろう。

では医療行為による身体的変化やセクシュアリティに対し、ヤマ

ダの家族はそれらをどのように捉えているとして描かれているのか。

ヤマダのことを「アコ」という女の名前で呼びながらも、母親の口癖は「何か手に職をつけなさい」であり、その口癖にはヤマダの経済的な自立を促している意図が読み込めるだろう。それと同時に、身体の性を心の性に合わせ〈身体も精神も女性〉になろうとしているヤマダに対し、将来を案じて経済的に自立することを促している母親は、意識的か無意識的か、ヤマダの将来に〈結婚の可能性〉を見出している存在として読み取ることができる。また姉はヤマダを昔から普通の子ではないと表したことで、現在も「普通ではない」存在としてヤマダを捉えていることになる。姉の〈普通〉という枠組みからはみ出しているヤマダは、現在も姉にとって〈普通ではない存在〉なのだ。

中でも父親はヤマダを男の名でしか呼ばず、露骨に否定的態度を取っていると言える。「アキオ」と呼ぶ行為の裏には、父親がヤマダを〈長男として認識〉しているが故の、ヤマダに対するある種の抵抗を読み取ることもできるだろう。長男であつた息子は、成長期を経て青年の身体に向かつっていく段階において、自分たちが考えていた変化とは違う変化、つまり女性へと変化していく姿を見せつけなのだ。ヤマダの身体は、胸のふくらみや身体の丸みといった女性性が強調されていくのに反比例して、男性性（ヤマダの最も嫌いな部分）は委縮していく。息子のこのような成長の仕方、男性性を徹底的に排除するヤマダの行為は父親にとって「グロテスク」な行為として映っている。

ヤマダの〈女性化する身体〉の対比として、ヤマダにちょつかい

を出してくるクラスメイト「小太りでにきび顔の男」が登場する。彼の容姿は「にきび」が強調されており決して美しい対象として描かれていない。その彼をヤマダは「生理的に」嫌つてゐるのだが、裏ごししたような肌を持つヤマダとにきび顔の彼を対比したとき、醜いながらも美醜の対比として読み取れるのはもちろんのこと、そこに成長過程における自然さと不自然さも読み取ることができる。醜いながらも〈自然な成長過程〉の中で変化をしていくにきび顔の男子生徒に対し、ヤマダが望んで手に入れた滑らかな肌は医療行為によって手に入れたものであり、ヤマダが〈自然な成長過程〉から逸脱した〈不自然な成長〉をしている存在であることが強調される。

ヤマダは自分を「身体が間違つてしまつてゐる女性」として捉えていることから、同性愛者として描かれてはいない。敢えて示すとするならば〈男性に好意を抱く異性愛者としての女性〉ということになるだろう。しかしヤマダが現在通つてゐるのは、〈男性であることが前提条件〉の環境である。故にその所属する共同体（アルバイト先を除く）の中において、ヤマダは男性のままなのである。そしてそれは父親にとつても同じであり、ヤマダは「アキオ（男）」であり「アコ（女）」ではないのだ。男子校に通うヤマダは、自身を女性として認識していくもそこに属す限りにおいてマジョリティからは〈異端者〉として見做される。トシヒコに好意を寄せるヤマダは、この共同体内においては男性であるため、〈恋愛対象が男性である男性〉として認識される。一部の男子生徒が変化途中にあるヤマダの身体を「気安く」触るのも、ここに起因していると言えるだろう。

スカートを穿いてきたことでヤマダの母親は学校に呼び出され、

教室内の生徒たちが一齊に窓際に寄つてその様子を覗いてゐる様を、トシヒコは馬鹿馬鹿しいと見做している。境界線を越えることなくその内側に留まつてゐる人々が、そこを越える存在を集団で〈異端視〉する様子は、トシヒコにとって「退屈な世の中」の縮図として映つてゐるのだ。しかしこれは、トシヒコがセクシュアリティに対して寛容であるからではない。第一トシヒコはヤマダがスカートを穿いて登校してきた際、異端視する生徒たちとヤマダを同様の「馬鹿馬鹿しい」という言葉で形容している。

トシヒコだけでなくヤマダもまた、他のセクシュアリティに関して〈寛容である〉とも〈正しい認識〉を持ち得てゐるとも言えない。ヤマダとアルバイト仲間「ユキちゃん」がアルバイト先で繰り広げた会話内において、「ホモの人と付き合うと、あそこばかり触つてくるつて言うよね」と話すヤマダに対し、ユキちゃんは「そうだよね」と返答してゐる。これは〈ホモ〉を〈男性器に執着する男性〉と見做している偏見の表れと読み取ることができる。ヤマダをトイレに誘い性的な行為をさせようとした男子生徒との会話場面において、その男子生徒が「なあ、一緒に来いよ、口でさせてやるからよ。くわえたいだろ、お前」とヤマダに向かつて言い、それに対しヤマダは「最低」と返している。この男子生徒との会話場面がヤマダとユキちゃんの会話場面のすぐ後に挿入されることで、ヤマダは男子生徒に対し「最低」と言つてゐながらも、その男子生徒とヤマダ本人は〈男性のことが好きな男性は、男性器に執着している〉という点において共通の認識を持つてゐると読み取ることができるのだ。

新学期になつてもスカートを穿き続けるヤマダに対し、トシヒコは「本物の女だつてそんなにスカートばっかり穿いてねえぞ」と忠

告をする。ヤマダは、最終場面においても周囲やトシヒコから「偽物」として位置付けられ、何処の誰だかわからない複数人から暴行まで受けることになってしまった。自身の価値基準に従い構築された「本物」という概念と比較することで、そこから逸脱する他者を「偽物」と見做す周囲の視線を浴びながらも、ヤマダは変化することを止めずスカートを穿きながら男子校に通う。ただしヤマダという存在は境界線の内側に留まっていることはなく、母親が学校に再度呼び出されながらも、春休み中に胸にシリコンを入れる計画が語りによって明かされることで、一つの共同体に属しながらもそこから境界線を自由に越える存在として在り続けることを読者に予期させるのだ。

### おわりに

藤野千夜「少年と少女のポルカ」では、「ホモであることを恥まないホモ」としてのトシヒコ、自分を「女」と自認しながら男子高校に通うヤマダ、そして電車に乗れなくなってしまったミカコ、彼等三人を軸に学校という閉鎖的且つ「性」の境界線を顯在化させることと制服」という観点から、ヤマダがキュロット・スカートからスカートへと移行する際に生じた「違和感」について、実際日本の高校を取り組まれている昨今の事象も踏まえながら考察した。その際、中村桃子の指摘するジェンダー秩序を作品内に読み込み、「無徴・標準・中心」としての男性だけで構成された共同体の中で、キュロット・スカートによつて保たれていたジェンダーの曖昧さが、スカー

トという「有徴・例外・周縁」のものに変化したことと、ヤマダをも「有徴・例外・周縁」の存在へと変化させてしまったと述べた。そして「服」という小道具の持つ、人々の中に根付いた無意識的にジエンダーをカテゴライズさせてしまう作用を「制服」として作中で利用することで、学校という環境下で顕在化する「性」について論じた。またヤマダに象徴された、当時批評家でさえ的確に表現することが難しかつたとされる「性同一性障害」が、現代の日本ではどのように定義されているのか、また性別適合手術が正当な医療行為として認められているということを確認し、ヤマダを「偽物」とする視点と「本物」とする視点の両サイドからの考察を試みた。

藤野千夜は本作以外にもいくつかの作品にセクシーシュアルマイノリティの役割を担つたキャラクターを登場させている。中でも芥川賞を受賞した「夏の約束」(『群像』一九九九年一二月号)にはゲイカップルとランスセクシュアルの女性が登場するのだが、藤野の特徴ともいえる「日常的」な物語展開に対してか、選評の中には「平凡」「軽い」といった言葉も見られた。しかし、デビューから芥川賞を受賞するまでの間に発表された(セクシュアルマイノリティが登場する)作品を読み解くことで、それらは単なる「日常的」で「平凡」な物語ではないと理解することはできる。彼等がこなす日常生活が「淡々と」描かれるながらも、差別や偏見や暴力を含む様々な「非日常的」とも言える「普通から逸脱したもの」を、そこに特化する形ではなく日常に並列させながら組み込んでいくと同時に、それらが大きな事件へと発展し解決するということの無い物語展開を演出することで、日常に潜む小さな不安としてそれらの刺激が残るようなな物語を描いているのだ。少なくとも、日常の中に確固としてある「規

範」の存在を読み手に気付かせ、一方向からだけではなく、当事者の視点、当事者を見つめる視点、また第三者の視点等様々な角度から捉えられた物語を描くことで、読者の心中に揺さぶりを呼び起す役割は十分に担っている作品であり、作家であることをいふ事はできるだら。

## 註釈

- 1 「制服キュロット、かわらめと防犯性両立愛知の女子中高」『朝日新聞デジタル版』110111[1月11日]
- 2 <http://www.asahi.com/edu/articles/NGY201303190009.html> 参照
- 3 <http://www1.nhk.or.jp/rhousoku/koremade/130528.html> 参照
- 4 <http://www.takakura-hi.info/point1/1367494581-920490/> 参照
- 5 「制服交換『わざわざ』離れだら…」『朝日新聞デジタル版』11014年11月11日
- 6 中村桃子『〈性〉と日本語』「こばがいへる女と男」11007年10月30日 日本放送出版協会
- 7 ハーリイス・バトラー著、竹村和子訳『ハーリンダートラブル：フェリーズムとアイデンティティの攪乱』一九九九年四月 青土社
- 8 性同一性障害について、北海道文教大の研究チームは全国の推計患者数が四万六千人に昇ると発表し、厚生省が医療機関に対し行った調査結果（約四千人を対象）の十倍以上の患者数がいる可能性があると指摘している。また、文部科学省が11013年4月から12月

の期間で「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査」を国公私立の小中高校、特別支援学校（約1370万人）を対象に実施し、全国の児童生徒のうち60人が性別に違和感を抱いていると答えた」とがわかった。

## 法令データ提供システム「性同一性障害」

<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H15/H15HO111.html> 参照

日本精神神経医学会とは、当初は日本神経学会という名称で一九〇一年に精神医学の呉秀三と内科学の三浦謹之助の二名が主幹となり、会員数約一百名で発会。後、一九三五年名称に「精神」を入れ、一九四六年に社団法人、11011年に公益社団法人となる。日本精神神経医学会ホームページ「学会概要」

<https://www.jspn.or.jp/about/outline.html>